論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	渡邉　真帆
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

幼稚園３歳児保育室の物的環境と子どもの行動との関係
―登園後の身支度場面にみる園生活への適応―

論文審査担当者

主　　査	教　授	七木田　敦
審査委員	教　授	深澤　広明
審査委員	教　授	鈴木　理惠
審査委員	准教授	中坪　史典
審査委員	准教授	三時眞貴子

〔論文審査の要旨〕

本研究は、登園後の身支度場面を対象に、幼稚園３歳児保育室の物的環境と子どもの行動との関係について、具体的には、物的環境が子どもにどのような行動を促すのかを明らかにすることで、彼（女）らが園生活に適応していく過程について検討したものである。従来、子どもの園生活への適応については、人的環境としての保育者と子どもとの関係を中心に議論されてきた。本研究は、そうした先行研究とは異なる側面を浮き彫りにした。

第１章では、家庭生活から集団生活への毎日の移行として捉えられる、身支度を含む登園の時間帯に関する研究動向を整理して示した。先行研究の多くは、多忙な時間帯の中で、子どもに個別に対応する保育者のありようを中心に議論されてきたことから、保育者と子どもとの関係だけでなく、彼（女）らを取り巻く周囲の物的環境との関係から捉えることの必要性を指摘した。

第２章では、物的環境と子どもの行動との関係を明らかにするにあたって、人間と環境の関係がどのように捉えられてきたのかを概観するとともに、本研究で用いる理論的枠組みを探り出した。具体的には、Gibson のアフォーダンス（affordance）理論に依拠して Norman（2013）が提示したシグニファイア（signifier）である。これに依拠することで、特定の行動を促す道具のデザインが分かるだけでなく、知覚された（されない）アフォーダンス、ある行動を阻むアフォーダンスなど、アフォーダンスの考え方を拡張し、日常的に使用する道具との関係を明示することが可能となった。

第３章では、本研究の対象と方法について述べた。本研究では、登園の状況や身支度の内容が異なる H 幼稚園、S 幼稚園、K 幼稚園の 3 園を選定した。データ収集は、入園式直後から 1 学期）終了までの期間、ビデオカメラ、デジタルカメラ、メモを用いて行った。

第４章では、入園間もない 3 歳児の登園後を対象に、物的環境のどのような特徴が身支度の「ルーティン化」を促すかを明らかにした。結果として、いずれの園でも身支度の「ルーティン化」がみられるとともに、身支度に関する物的環境のシグニファイアの検討を通して、所持品を収納する物的環境に 2 点の共通点が示された。第一に、個人スペースを作

りだす物的環境のシグニファイアである。第二に、多くの身支度に関する物的環境は、「置く」または「掛ける」動作を促す形状に限定されており、子どもが一目見てどのような動作をすればよいのか分かることである。

第５章では、登園後の身支度場面における保育室の物的環境の配置が子どもにどのような身支度を促すかを明らかにした。結果として、ロッカーのシグニファイア、及びロッカーと他の身支度に関する物的環境との配置関係が、子どもたちの身支度の行動範囲を一部制限しながらも、身支度の流れを作り出していたことが示された。

第６章では、身支度中の子どもが何に触れ、どのように身支度に取り組んだのかを明らかにするとともに、物的環境が子どもにどのような行動を促すのかを検討した。結果として、3 歳児が登園後の身支度に慣れていく中で、物的環境が身支度の効率化を促す一方、身支度以外の行動も促すことが示された。

本研究の学術的意義として、次の点を挙げることができる。

第一に、子どもの園生活への適応を捉え直した点である。本研究では、園生活を送る上で習得が求められる登園後の身支度について、物的環境との関係に着目することで、単に身支度を習得するだけではない子どもの姿を明らかにした。それによって保育者や園のルールにのっとった行動を自ら変えていく姿まで含めて、子どもが園生活に適応していく過程を捉えることができた。

第二に、入園間もない 3 歳児の園生活への適応における物的環境との関係を明らかにする中で、子どもたちの園生活を、生活か遊びかに二分することなく描き出すことを可能にした。登園後の身支度場面に焦点を当てながらも、身支度する姿のみを分析したのではなく、この場面を構成する物的環境が子どもにどのような行動を促すかを検討したことによって、これらが不可分であることを可視化することができた。

第三に、人的環境である保育者とのかかわりが重要とされる入園直後の時期について、保育者との関係ではなく物的環境との関係に着目したことで、より俯瞰的に子どもの行動を可視化した。入園間もない時期は、保育者の存在が特に重要な時期ではあるが、個別のかかわりをしている周囲にも子どもたちは存在する。先行研究では、そうした子どもたちの様子は捨象されることが多かった。それに対して本研究では、子どもがどのように園生活に適応していくかについて、保育者との関係を超えて検討することができた。

第四に、Norman のシグニファイアの枠組みを用いたことで、物的環境の特徴と子どもの行動との関係を捉えることを可能にした。アフォーダンスは、要因を特定することが困難であるが、シグニファイアは、デザインする側がねらいや意図を持って付与することが可能である。シグニファイアを特定することによって、保育者が保育室の物的環境の特徴を理解するとともに、子どものための環境構成の検討が促されると期待できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3 年 2 月 9 日